

平成28年度小麦作柄現地調査の概要について

平成28年6月29日(水)～7月1日(金)の3日間の日程で現地調査を行った。

本調査には、北海道農政部、北総研農業研究本部、ホクレン農業協同組合連合会、北海道農業共済組合、農林水産省北海道農政事務所、北海道農業研究センター、北海道農産物集出荷協同組合、製粉会社、地区米麦改良協会、北海道米麦改良協会などの関係機関から、のべ51名が参加した。

各現地圃場では、生産者の方々やJA、農業改良普及センター等の関係者の皆さんに参加を得て、地域および圃場の小麦の生育状況について説明をいただいた。



参加者一同(小清水町にて)

調査は、オホーツク管内は、小清水町 新村正敏氏、村松正道氏、網走市 オホーツク網走第21営農集団利用組合の3カ所。十勝管内は、帯広市 新井清隆氏、芽室町 十勝農業試験場、鹿追町 中鹿追コンバイン利用組合の3カ所。上川管内は、杉村賢一氏の1カ所。空知管内は、美唄市 田島裕也氏、岩見沢市 岩見沢市北村試験圃、滝谷陽一氏の3カ所の合計10カ所で行った。また、調査終了後に空知農業会館で検討会を行い、本年度の小麦の生育状況と今後の技術対策をまとめた。

秋まき小麦の生育は、秋期、播種期は平年より3日程度早かったが、その後、やや低温で推移したことから、越冬前の生育は、空知・石狩で平年を上回ったものの全般に1～2日の遅れとなった。

春期は、全道的に融雪は早く、また雪腐病の発生も少なかったことから、越冬状況は良好であった。5月上～下旬にかけて、高温少雨で経過したことから、生育が進み幼穂形成期、止葉期は大幅に早まった。しかし、6月に入り、長雨、日照不足の影響を受け、全道的に生育は緩慢となった。そのため、出穂期は道央・道南では5日以上早まったが、道北・道東では、3日程度早まるにとどまった。

6月15日現在の「農作物の生育状況」(北海道農政部発表)では、稈長が長く、穂数は平年を上回り、生育は3日早いと報告されている。今回の調査でもほぼ同様な傾向ではあるが、7月1日現在では平年並になると見込まれた。

本年は、越冬状況も良好で、春先から周期的に降雨もあったことから、追肥効果も高まり、草丈が長く茎数は平年より多く確保されている。

6月3半旬～5半旬の長雨、日照不足の影響で登熟は緩慢に進んでいた。

開花期頃の日照不足の影響で、一部稔実が劣る状況も見られたが、総体的に穂数が確保されていることから、収量構成要素は平年並に確保されていると観察された。

また、収量・品質に影響を及ぼす倒伏については、道央の一部圃場の肥料散布の掛け合わせや地力の高い部分で発生が見られる。穂数が平年より多いことから、今後登熟が進むにつれて倒伏面積の拡大も心配されるので、今後の生育を注視していきたい。

病害虫では、開花期頃からの長雨により、赤かび病の発生が懸念されたが、全道的に降雨の合間を縫って防除が実施されており、今回の調査時点では目立った発病は見られなかった。今後の発病動向を注視していきたい。

しかし、一部地域では、赤さび病も散見されたので、天候が回復し高温条件なった場合の発生対策も念頭に入れる必要がある。

全道的にみると、一穂粒数はやや少ないものの、穂数が平年より多く確保されていることから、今後の気象が平年並に経過すれば、平年並～並以上の収量確保が期待できる。

秋まき小麦「きたほなみ」では、品種本来の特性を發揮させるために地域条件に応じて、播種量や作業体系による播種精度の向上、適正な施肥管理が行われている。生産者、JA、普及センターなどが連携して収量・品質向上に取り組んでいる状況が十分理解できた。「きたほなみ」は、昨年が多収・高品質であり、実需の評価も非常に高かったことから、地域で一丸となった取組みによる高位安定を期待したい。

春まき小麦は、融雪が早く、圃場の乾燥も順調であったことから、平年並からやや早く播種作業が行われた。播種後、低温で経過したことから、出芽に時間を要したが、出芽期は平年並となった。その後は、適度の降雨と高温で経過したことから、遅れ穂の発生は少なく観察された。草丈は平年並であるが、穂数が平年より多く確保されている。

本調査では、地域や圃場間での生育のバラツキが見られるものの、全般的に生育は順調であった。

次に、今回調査した生産者の取組みの一部を紹介する。小清水町の新村正敏氏は、平成27年度全国麦作共励会で農林水産大臣賞を受賞された生産者である。昨年秋の播種時期に降雨があり、地域では適期播種できない圃場もあったが、新村氏は前作物の収穫作業を計画的に行うことで適期に播種が出来ており、生育は揃っていた。

播種予定圃場には、完熟堆肥を3年毎に全圃場に4t/10a施用している。

また、播種にあたっては、追肥の打てる小麦づくりのため少量播種を行っている。安定した少量播種を実現するため、播種床の造成は丁寧に行い播種深度の安定化に努めている。

昨年は、5.4kg/10aの目標より1kg程度多くなつたので、起生期追肥を遅らせ、茎数をコントロールしている。

このような栽培技術は、地域の先輩との情報交換を通じて相互に研鑽しており、特に、生育後半、葉面散布などで、切れ目無く追肥し葉色が淡くならないよう管理している。

新村氏の小麦栽培は、地力の増進と適切に追肥の打てる小麦づくりが実績に反映されている(H27年度 収量1,007kg/10a、全量1等Aランク)。

今回の調査では、堆肥施用や緑肥栽培による、継続的に土づくりを行っている生産者がほとんどであった。基本技術の実践こそが、高位安定多収の条件であると感じた。



検討会の様子

検討会では、本年の作柄として、6月上旬の低温、その後の長雨、日照不足となつたが、生育は平年並～やや早くなっている。一穂粒数は、多収であった昨年よりやや少ないものの、穂数が多く確保されていること、赤かび病の多発も回避できていることなどから、地域間差が目立つものの平年並～平年をやや上回る生産量と品質を期待できるという意見が多かった。

小麦は、登熟期間の気象経過が収量・品質に大きく影響することから、収量構成要素を確保しても予想した収量・品質を確保出来ない場合がある。今後の気象が良好に経過し平年並以上の作柄となることを期待したい。

執筆者：北海道農政部生産振興局技術普及課

北見農試技術普及室

上席普及指導員 三宅俊秀

(北海道小麦品質向上対策委員会委員長)